

〔問題一〕次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

a 正岡子規（一八六七—一九〇二）はこれまで近代俳句の創始者と考えられてきた。しかし、近代俳句は江戸時代半ばの**b**一茶にはじまっているなら、子規は近代俳句の中継者だったということになる。

A 我宿にはいりさう也昇る月

B 手の内に螢つめたき光かな

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

枝豆や三寸飛んで口に入る

* 鶏頭の十四五本もありぬべし

子規の俳句は誰にでもわかる。子規は明治の新しいメディアとして登場した新聞を活動の場とした。新聞の読者は大衆であるから誰にでもわかる俳句でなければ載せる意味がない。仮に**c**芭蕉の句のような古典を踏まえた古典主義の俳句を新聞に発表しても誰もわからないだろう。また子規の句は人間の心情を描く。

春雨のわれまぼろしに近き身ぞ

いくたびも雪の深さを尋ね **C**

初暦五月の中に死ぬ日あり

病床の我に露ちる思ひあり

糸瓜咲て痰のつまりし仏 **D**

どの句も脊椎カリエスのため六尺の病床に縛りつけられた子規の無念の思いをありありと映し出す。わかりやすさと心理描写。この二つは近代文学の条件だった。そしてそれを備えた近代大衆俳句は子規になってはじめて生まれたのではなく、一茶の時代にすでに誕生していた。子規は一茶からつづく俳句の大衆化の流れの中で句を作っていたのである。子規は「近代俳句の創始者」の榮譽を一茶に譲らなければならぬだろう。では子規は近代大衆俳句の単なる中継者にすぎないかといえ、それもまた誤りだろう。むしろ重大な役割を担ってい

た。「写生」という近代大衆俳句の方法をはじめて提示したことである。

写生は西洋絵画のデッサン（描写）に想を得て、子規が見出した俳句の新しい方法だった。それは画家が絵を描くように目の前にあるものを言葉で写すということに尽きる。晩年、子規は写生を俳句だけでなく文章や短歌にも応用してゆく。芭蕉や蕪村の古典主義の時代、俳句は古典を知らなければ作ることも味わうこともできなかった。江戸時代半ばの大御所時代、近代大衆社会が誕生すると、古典をまったく知らない人々まで俳句を作り鑑賞するようになった。この時代の一茶は古典など引用せず、日常のふつうの言葉で誰でもわかる俳句を作ったために時の人となった。

しかしそれは一茶の才能に依る、いわば個人技だった。誰でも使える明確な方法を一茶がもっていたわけではない。このため一茶が世を去ると、俳句はふたたび古典主義俳句の模倣、いわば似非古典主義へと後退してしまう。似非古典主義の俳句とは時代はすでに大衆化が進み、近代に入っているにもかかわらず、それを無視して芭蕉の時代の古典主義俳句を模倣しつづけた俳句のことである。子規が「月並俳句」と攻撃した天保時代（一八三一—四五）以降の俳句がまさにそれだった。

こうした停滞がつづくなか、明治になって子規が提唱したのが写生だった。それは目の前にあるものを言葉にしさえすれば誰でも俳句ができるという、近代大衆俳句が待ち望んでいた俳句の方法だった。それまで月並俳句が寄りかかってきた古典に頼らないどころか、むしろ積極的に古典を排除しようとした。子規は近代大衆社会の新しいメディアである新聞を舞台に読者大衆に写生俳句を広めてゆく。こうして**①**子規の写生は近代大衆俳句の立て看板になる。

しかしながら子規の写生にはある重大な欠陥が潜んでいたといわなければならない。写生が目の前にあるものを言葉で描くことなら、**②**それは凝視と集中を要求する。裏を返せば詩歌の源泉である心を遊ばせること、ぼーっとすることを否定するものだからである。

子規はこの欠陥が姿を現わす前にこの世を去る。写生という方法が孕むこの問題に直面し、その修正を迫られたのは子規の後継者の高浜虚子（一八七四—一九五九）だった。

明治がはじまり、子規が生きた十九世紀はリアリズムの時代だった。リアリズムは直訳すれば現実主義、美術や文学では写真主義と訳す。それは十九世紀のヨーロッパで起こり、帝国主義の軍艦と商船に積みこまれてアメリカへアジアへアフリカへ、世界中へ拡散していった。

十九世紀半ば、列強の圧力に抗しかね、二百年間つづいた鎖国政策を捨てて開国した日本は、昼寝中に無理やり揺り起こされ、戦場へ駆り出された人のように帝国主義が猛威をふるう世界の現実に直面しなければならなかった。明治政府は国家の存亡を賭けて日本を欧米の列強なみの国に改造する方針を定め、国内のあらゆる分野で西洋化を推進した。美術や文学では西洋のリアリズムを採用する。俳句におけるリアリズムつまり写真主義、これが子規が提唱した写生だった。

ここでリアリズムについて考えておくべきことがある。

まず本場ヨーロッパ文学のリアリズムと子規が考えたリアリズムの違いについて。ヨーロッパのリアリズムは現実を直視し、内実を分析してありありと（リアルに）描くことだった。リアリズム、現実主義の「現実」とは人間や社会の現実であり、その外見のみならず精神も対象にしていた。というより、そのほうに重心があった。いうまでもなく文学の最大関心事は人間の心の動きであり、姿や顔などの外見はそれに付随し、補足するものにすぎないからである。

ところが子規が提唱した写生という方法は対象を眼前のもの、しかも外見を描くことに限定し、精神を無視した。これは西洋のリアリズムをお手軽なものに矮小化（わいしょう）したということである。明治時代、西洋化を急ぐあまり西洋文明の上っ面だけの模倣が俳句にかぎらず、いたるところで起きていた。

ヨーロッパ文学のリアリズムと子規の写生のもう一つの違いは、ヨーロッパ文学のリアリズムは現実をありありと描くための言葉の使い方、いわゆる修辭を重視するのに対して、子規はこれを意に介しなかった。子規の写生ではあくまで描く対象に重心があり、それをありのまま、つまり修辭を意識せず無技巧に描けば俳句ができると教えた。なぜならばヨーロッパ文学と違って、日本の俳句のほうで作ろうとする人口がはるかに多い大衆文学だったからである。歴大な俳句大衆に修辭の必要を説くのは③を食わせるようなものである。

しかし子規が説いた写生という方法にしたがって眼前のものをそのまま描くだけでは俳句はできない。それが不可能なことは俳句を少しやってみれば誰でもすぐ気がつく。ガラクタを描いたガラクタのようなガラクタ俳句ができるだけである。

言葉は「人の心を種として」（『古今集』仮名序）、つまり言の葉は人の心という種から生じた樹木に生い茂るという紀貫之の名言を待つまでもなく、言葉は心に発し、心に届くものだからである。俳句が誕生するには凝視と集中ではなく、想像力（イマジネーション）の働き、ぱーっと心を遊ばせる放心こそ必要なのだ。子規は写生を唱えたとき、この想像力という言葉の力を完全に度外視していた。

リアリズムについて考えておくべき、もう一つはまさに言葉の想像力との関係である。想像というと空想、絵空事と思われがちだが、言葉の想像力とは言葉の奥に眠る言葉の力のことである。

では言葉の奥に眠る想像力とは何か。たしかに言葉には「意味」がある。そして人間は言葉の意味を論理的につないで会話を交わし、文章をつづることによって社会で生きている。

しかし言葉は意味だけでできているのではない。言葉には意味のほかに風味というものが潜んでいる。言葉は氷山のようなものと考えればいい。意識の海面上に現れているのは意味である。これが言葉のすべてと思っていると、意識の海面下にもっと大きな風味が隠れている。

たとえば「バカー」といえば、ののしっているのである。しかし仲のいい夫婦や友人の間で「バカだなあ」といえば親愛の表現である。これが言葉の風味である。人間は言葉の意味だけでなく風味をわかっていないと社会で生きてゆけない。そして詩歌にとっては言葉の意味より風味のほうがはるかに大事なのだ。

桜という言葉は桜という特定の植物を意味している。これが桜という言葉の意味である。しかし桜という言葉は植物の桜を指示するだけでなく、桜という言葉がこれまで遭遇し、記憶したさまざまなできごとを内蔵している。これが桜という言葉の風味である。桜という言葉の奥に降り積もり、桜という言葉の風味を醸し出すさまざまな記憶がときおり目覚める。次の芭蕉の句がそれをよく表現している。

さまざまの事もひ出す桜かな 芭蕉

桜という言葉は桜という植物を指し示すだけではない。④桜にまつわるさまざまな記憶を花吹雪のように蘇らせる。これが言葉の想像力というものである。俳句、短歌、詩などの詩歌はこの言葉の想像力が織り出す想像力の賜物（たまもの）なのだ。ではリアリズムは言葉の想像力とどう関わっているのか。子規は想像を排して眼前にあるものを言葉で描く、それが写生であると説いた。そこでは想像力とリアリズムは対立する選択肢と考えられていた。

しかし詩歌の歴史を振り返れば、言葉はリアリズムが登場するはるか以前、その誕生のときから眼前のものばかりでなくさまざまなものを描く力を備えていた。子規が写生の先例として『万葉集』の歌や*凡兆（？—一七一四）や蕪村の俳句を引き合いに出すことができたのは、それらの和歌や俳句がもともと言葉のもつ描写の力を備えているからである。⑤子規は言葉が本来もつ描写の力を「写生」と名づけただけのことではなかったか。

こうしてみると、言葉の想像力を表現する方法の一つとしてリアリズムという方法があることがわかる。リアリズムだけが想像力の表現方法ではないということである。想像力とリアリズムは子規が考えたように二者択一の対等な両極ではなく、リアリズムつまり写生は言葉の想像力の表現方法の一つ、つまり想像力のしもべにすぎない。

（長谷川權『俳句の誕生』より）

* 鶏頭……ヒユ科の一年草。鶏のとさかのような花を付ける。

* 凡兆……野沢凡兆。芭蕉の門人の一人。

(一) 〰〰〰線部a「正岡子規」と親交のあった明治の文豪の作品として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 舞姫 イ 雪国 ウ 坊っちゃん エ 山椒魚

(二) 〰〰〰線部b「一茶」、c「芭蕉」、d「蕪村」の句を次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 桐一葉日当りながら落ちにけり イ 春の海終日のたりのたりかな
ウ めでたさも中くらいなりおらが春 エ 目には青葉山ほととぎす初がつお
オ 分け入っても分け入っても青い山 カ 五月雨をあつめて早し最上川

(三) 〰〰〰線部「はいりさう」を、ひらがな・現代かなづかいに改めなさい。

(四) A、Bの句の季節を次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

(五) C、Dに入る切れ字を次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号をくり返し用いてはいけません。

- ア や イ かな ウ けり エ ぞ

(六) 〰〰〰線部b「一茶」について、近代俳句が一茶に始まっていると言えるのは、一茶の句に何が備わっているからですか。本文中から十字程度で抜き出しなさい。(句読点は解答に含みません。以下の問題も同様です。)

(七) 〰〰〰線部①「子規の写生は近代大衆俳句の立て看板になる」とはどういうことですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 対象をありのままに描くことは『万葉集』にも見られる手法なので、俳句は伝統をふまえた正統な文学なのだと宣伝する。
イ 大衆とつながる手段として新聞を活用し、文学が本来目指すべき方向を社会に提示して俳句の意義を確立する。
ウ 俳句はなじみにくいものだというイメージを払拭し、大衆に広く受け入れられるわかりやすい文学形式だと印象づける。
エ 古典を引用することだけに力を注いでいる似非俳人の誤りを浮き彫りにし、自らこそが俳句の本流だと主張する。

(八) 〰〰〰線部②「それは凝視と集中を要求する」とありますが、なぜそれが「重大な欠陥」となるのですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 対象に向き合った時の素直な思いが現れないように、理屈で押し隠そうとするから。
イ 感覚よりも理が勝るために想像力が働かず、詩的表現として豊かなものにはならないから。
ウ 対象を見つめて直感的に描いたとしても、リズム感を持たない散文にしかならないから。
エ 他人との差別化を図ろうとして、ありふれた表現をすべて排除しようと努めるから。

(九) ③に入る言葉として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア しっぺ返し イ 毒りんご ウ 門前払い エ 待ちぼうけ

(十) 〰〰〰線部④「桜にまつわるさまざまな記憶」とありますが、それに関連する内容を述べた次の文章では、桜が散ることに對しての思いが二つ述べられています。と感じている。「にあてはまるように、それぞれ十五字以内で答えなさい。

桜という季語ひとつとってみても、古から人々が桜に対して抱いてきたものが、そこにすべて詰まっています。田の神の依り代として崇め、その年の豊凶を占った昔。しづ心なく花の散るらんと詠じた平安人、ものあわれ。

きの順序と、志願を受ける期限の日数がもういくらものこっていないことを知らせにくれた。

「受付にいる係りの女の子は、ちよつと*シャンだぜ。お前もはやく行けよ。」豊田はそんなことも云った。

「そうか。それじゃ、お前に先手を打たれないうちに、おれも早速行くとするか。」

その日から受付シメキリの期限のくるまでの十日間、④およそ僕のやったことは自分にも想像するのがいやになるような奇怪なことだ。……豊田はその十日間に四回僕と顔を会わせた。二回目によって来たのは、なかに一日おいてからだだったが、その時は*タカスケ画伯から、よく決心をつけた、立派な覚悟だ、その覚悟がつけばお前達にも前途の見とおしはつくはずだ、と賞められたと云った。すると、僕はその豊田の話から、僕自身も一度誰かに相談をしておかなければならぬような気になったのだ。そして僕が相談相手に選んだのは、父の友人のKと云う陸軍大佐だ。Kさんは僕が父の用事の連絡を頼まれて前に一度その役所へ訪ねたことがあったが、そのとき付近の有名なフランス料理店で僕をご馳走してくれたことがある。そのことを思い出しながら僕は出かけた。……僕はむしろその料理店のスープを飲ませてもらうことだけを期待したのだと云える。軍人である以上僕のCイコウに異論があるはずはないだろう。……ところで、この計算は複雑なものだった。無意識の僕は、K大佐が軍人でありながら世俗的な常識をかねて誇っているのを考慮に入れていた。もし、反対ならスープにはありつけないだろうし、僕は悲観をするだろう。

果せるかな、K大佐は反対した。大佐にとっては盲目的な愛国少年のはやりたつ氣勢をなだめ説得することに快感があるらしかった。それは僕にとって好都合だった。結局は云いまかされるにきまつている議論を一時間あまりも熱心に続けたあげく、糧秣廠で新しくつくられた雑草製のマンジュウの大箱をあたえられて僕は帰ってきた。

三度目に顔を合わせた豊田に、僕はそのマンジュウを食べさせながら、「くさったよ、おれは……」とそのいきさつを話すと、豊田は一瞬顔をくもらせたが、愉快そうに笑いこけた。僕がK大佐の言葉に左右されるとは思わなかったのである。僕は彼に、そう思わせないようにしか語る事ができなかった。

四度目に豊田に会ったのはシメキリの前日、銀座の裏通りにあるさびれた喫茶店だ。夕刻になって家を出ると僕は、以前は豊田たちとよく行ったことのあるその店の二階へ上った。そうでなくても食料品の仕入れが次第に困難になっていたその頃では店に活気は乏しかったが、その日はとくに閑散をきわめており、僕のまわりには誰一人客はいなかった。片隅の椅子でぼんやりしていると、埃ッぽい破れた窓掛けのガラス窓の外の光が一瞬くらくらくなったようだ。その時、反対側の階段を上ってくる豊田の影がうつった。……僕はそのときの豊田の顔を忘れることができない。土色の皮膚に、大きな両眼が濁んだ水のようにウツロにひらかれていた。二階に一人しかいない客を僕だとは気づかない様子で、長い脚で泳ぐようにテーブルの間をすりぬけようとした。おもわず僕は呼んだ。

「豊田。……」

「おお、そこにいたのか。」

僕が逃げ出したい、と思ったのはそのときからだ。

「どうした？ 手続きはもうすんだのか。」彼は本当にDムシンな顔できいた。

「まだなのだ。……僕はまだ戸籍の書類その他、手続きに必要な一切の準備にも手をつけていない。それはもう明日には間に合いつかないのだ。」

豊田は別段、僕をとがめる様子はなかった。彼の眼の前で僕は裏切ったわけだが、僕が完全に騙しおわったそのときに、豊田の方では試そうとしていた僕の心をウラのウラまで見とどけたわけだった。……その日から間もなく、彼は両親の故郷の九州のF市に身体検査を受けるために出発した。

それから、およそ半年たった年末の近いある日、僕は豊田からのハガキを受けとった。

——いよいよ自分の入営する日も近づいた。こういうことを自分の方から云い出すのも変なものだが、君ともしばらく会っていないし、次の形式によって送別会をひらいてほしい。会費はもちよりで金十円、会場は別にきめないが、いつか君に出会った喫茶店へ一応集るとしよう。*風亭園の連中もきてくれることになっている。ぜひ会いたい。

その日、なつかしさと、⑤豊田の寛大さに感謝したい気持ちだけで、よろこび勇んで出掛けた僕は、よほどの恥しらずか、甘ったれた男なのであろうか。僕は豊田を徴兵検査に送りこんでしまったあと、うしろ暗い自分の影を見せつけられるように、豊田とも、その他の遊び仲間の連中とも、背を向けており、彼等に出会い、Cそうな場所へも足が遠のいていたのだ。約束の喫茶店の二階にはWというのが一人いるだけだった。僕は悪い予感がした。まだ時間がはやかかったし、Wはきちょうめんな男だから別段、彼一人が先にきていることに特別の意味のあるはずはなかったが、どういふものか僕は彼が苦手だったのだ。……しかし間もなく豊田が姿を現した。

僕とWとは学生服だったが、豊田は和服にインバネスを羽織っていた。そして、ふところからメッタに売っていない敷島というタバコをとり出して、ゆっくりと火をつけた。僕はきいた。

「MやYは？」

「dくん、もうそろそろくるはずだ。」

半年間、全然顔をみなかったというわけではなく、とびとびには何度か会っていたのだが、こうやって見ると豊田は半年どころか十年もの年をへだてて会うような気がした。ハガキの文面から僕は、うちとけるとは行かないまでも、おたが

いに表面的な親しさでもとりかわすことが出来るだろうと思っていたのだが、⑥ 豊田と僕との間にはそんなものもまたちがった異様なものが流れている。

「もっと早く来るつもりだったのだが、途中で自動車のテール・ライトが消えちゃってね。……」

「テール・ライト？ ……ヘッド・ライトのことだろう。」

「そうか。そうだな。……もう、おれは英語を忘れてしまったよ。」

そう云ったかと思うと豊田は、他の連中がおそいから会費を集めて置くこうと、手を出した。そして「便所へ行ってくる」と云いのこして階下へ降りて行った。……その古めかしいマントの下で、あの旅行カバンのような角ばった肩をこころもち右下りに倒しながら、階段の降り口へ歩いて行く豊田の背中をみて、僕は軽いおどろきの声を上げた。

それは、まるで老人の背中だった。……四十歳とも七十歳とも年齢のしれぬ、ただ積み重ねられた極度の疲労感をあらわす背中だった。そして、この後姿が僕のみた豊田の最後だった。なぜなら、そのまま彼は一時間たっても二時間たっても僕たちの所へ姿を現わさなかったから。

豊田福光がそれ以後どうなったかは僕はまるで知らない。風亭園倶楽部の連中とも、その後会っていないので、彼のたよりは聞くことができない。ただ、Wや、むかし豊田の家の近所に住んだことのあるというような人から、E ナンボウの戦場で戦死したとも、東京の空襲の際に死んだとも、きくともなしにきいている。⑦ もし豊田が戦死したのだとすれば、豊田を殺したのは僕だということになるかもしれない。

僕は豊田のことを想い出すたびに、どういうわけか「王様の耳」の話を想い出す。ひとりの床屋がこっそり、誰も知らない林の中の大きな樹の中に、「王様の耳はロバの耳だ」といって吹き込んだという話である。……僕はそこに、そんな秘密の声をのんだ木立ちがあるように思えてならない。

(安岡章太郎『王様の耳』より)

* シャン……顔立ちの美しい人のこと。

* タカスケ画伯……新進の洋画家で豊田の叔父にあたる。

* 風亭園……学生が仲間と遊ぶことを目的にして作ったグループの名称で、僕と豊田も参加していた。

(一) 〓 線部AとEを漢字に改めなさい。

(二) ~~~~~ 線部aとeの品詞名を次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を何度用いてもかまいません。

ア 名詞	イ 動詞	ウ 形容詞	エ 形容動詞	オ 連体詞
カ 副詞	キ 接続詞	ク 感動詞	ケ 助動詞	コ 助詞

(三) 〓 線部①「二つの『友情』が眼の前にある」と同じことを表している部分を本文中から四十字以内で探し、最初と最後の三字をそれぞれ抜き出しなさい。ただし、句読点や記号も字数に含めます。以下の問題も同様です。

(四) 〓 線部②「一等愉快で一等実現するのぞみのない想像」③「もっとも憂鬱なもっとも現実感のある想像」が示す意味を、
「〓」という想像。「〓」にあてはまる形で本文中からそれぞれ抜き出しなさい。ただし、②は七字以内、③は五字以内で答えなさい。

(五) ——線部④「およそ僕のやったことは自分にも想像するのがいやになるような奇怪なことだ」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 約束を守って軍隊に入る手続きを済ませた豊田が、まだ手続きをしていない僕に対して、友人としての好意から手助けをしようとしているのに、なぜか豊田の言動に悪意を感じて、締め切りが迫っても手続きをしないでいた。
イ 軍隊に入る手続きを済ませた豊田が、まだ手続きをしていない僕のことを心配して、いろいろと教えてくれたのに、生来の怠け癖から締め切り期限が迫っても全く行動を起こさないでいる自分に嫌悪感を感じていた。
ウ 約束を守って予定通りに軍隊に入る手続きを済ませた豊田とは対照的に、軍隊に入ることに反対している知人の意見を重く受け止め、軍隊に志願することの是非を再考することにした僕は締め切り日が近づいても手続きをしないでいた。
エ 軍隊に入る手続きを僕と約束した通りの日に済ませた豊田とは対照的に、まるで友情を裏切るかのように約束を破り、手続きの締め切り前日まで準備さえまったくしていなかった自分に不快感や不可解さを感じていた。

(六) ——線部⑤「豊田の寛大さに感謝したい」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 約束を守らなかった僕を心の底では深く恨んでいるはずなのに、僕に対して一切批判がましいことを口にはせず、他の仲間と一緒に送別会にさそい、好意を示してくれた豊田に対して僕は畏敬の念を抱いている。
イ 二人で兵隊に志願するという約束を果たさなかった僕の罪悪感を察して、約束のことには全くふれないうで自分の送別会にさそってくれた豊田の心づかいに僕は友情のありがたさを感じている。
ウ 二人で兵隊に志願する約束をしておきながら、その約束を守らなかったことに対して罪悪感を感じていた僕は、豊田がそのことを非難することもなく送別会にさそってくれたことをありがたく感じている。
エ 約束を守らなかった僕を心の底では深く恨んでいながらも、それを僕に感じ取られないようにふるまい続けてくれているのは、かつては親友同士であった僕に対する善意にもとづくものだと考えている。

(七) ——線部⑥「豊田と僕との間にはそんなものともまたちがった異様なものが流れている」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 豊田との関係について、旧友としての関係くらいは今もあるだろうと期待していたが、すでに日本軍の兵士となった豊田とそうではない自分との間には計り知れないほどの隔たりが存在していた。
イ 豊田との関係について、かつてのような親交を期待していたわけではなかったにしても、互いを気づかう程度の関係にはあるものと思っていたが、実際には全く異質なものに変化していた。
ウ 久しぶりに会った豊田の態度からは友人としての親しさとは全く異なった険悪な印象が感じられ、二人の間には相手を気づづかり、思いやったりするような友情を見いだすことはできなかった。
エ 久しぶりに会った豊田の態度は不気味なものに感じられ、送別会が行われる場所にはふさわしくない不穏な空気が流れていたが、それは僕に対する豊田の強い憎しみの気持ちを表しているようだった。

(八) ——線部⑦「もし豊田が戦死したのだとすれば、豊田を殺したのは僕だということになるかもしれない」とあるが、その理由を五十字以内で説明しなさい。